世間解　第四三四号
令和六（二〇二四）年　四月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―摂取不捨　その六―

四月になりました。お正月とはまた違う新しいスタートの時であります。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

さて、しばらく「摂取不捨」ということをお聞かせいただいております。宗祖・親鸞聖人も大変大切にされ、お書物のあちらこちらでお味わいをくださる、阿弥陀さまのお救いのはたらきが端的に顕われているご法語であります。元は『観無量寿経』の中に説かれる「念仏の衆生を摂取して捨てたまはず」というお書物の中で、ことばですが、源信僧都さまはその経説を『往生要集』というお書物の中で、

またかの一々の光明、あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、摂取して捨てたまはず。われまたかの摂取のなかにあれども、煩悩、眼を障へて、見たてまつることあたはずといへども、大悲倦むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ。

とおっしゃってくださいました。親鸞聖人はそれを承けて、「お正信偈」に、

極重悪人唯称仏　我亦在彼摂取中　煩悩障眼雖不見　大悲無倦常照我

と讃詠くださるのであります。また『高僧和讃』の「源信讃」では、その意を、

煩悩にまなこさへられて　摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらすなり

とご和讃くださいますし、さらに『尊号真像銘文』というお聖教では、源信僧都のお言葉を、

首楞厳院源信和尚の銘文

「我亦在彼　摂取之中　煩悩障眼　雖不能見　大悲無倦　常照我身」文」

「我亦在彼摂取之中」といふは、われまたかの摂取のなかにありとのたまへるなり。「煩悩障眼」といふは、われら煩悩にまなこさへらるるなり。「雖不能見」といふは、煩悩のまなこにて仏をみたてまつることあたはずといへどもといふなり。「大悲無倦」といふは、大慈大悲の御めぐみ、ものうきことましまさずと申すなり。「常照我身」といふは、「常」はつねにといふ、「照」はてらしたまふといふ。無礙の光明、信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは、つねにまもりたまふとなり。「我身」は、わが身を大慈大悲ものうきことなくして、つねにまもりたまふとおもへとなり。摂取不捨の御めぐみのこころをあらはしたまふなり。「念仏衆生摂取不捨」のこころを釈したまへるなりとしるべしとなり。

と、詳しくお釈しくださっています。

ここに「「常」はつねにといふ、「照」はてらしたまふといふ。無礙の光明、信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは、つねにまもりたまふとなり。」とおっしゃいます。阿弥陀さまのおはたらきは「常」であります。「つね」なのであります。親鸞聖人は『一念多念文意』というお聖教の中で「常」を、

「常といふは、つねなること、ひまなかれといふこころなり。ときとしてたえず、ところとしてへだてずきらはぬを常といふなり。」

と釈されています。阿弥陀さまの「お前さん、必ず支えているよ。私の名を称えながら大切に大切に日暮らししてくれよ」というおはたらきは決して途切れることがないのであります。

そういう「摂取不捨」のおはたらきがあり続けてくださっていたから、私は今こうして「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏申す身にならせていただいたと申しあげてよいのだと思います。わたしが何か分かった、知った、その引き換えに阿弥陀さまのおはたらきが来てくださるのではなかったのです。私が何も知らない時から「大悲無倦常照我」という「摂取不捨」のおはたらきがあり続けてくださり、今そのおはたらきを知らせていただくお育てに遇い、同じ「摂取不捨」のおはたらきに包まれているからこそ「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏申させていただけておるのであります。

合掌